

ドイツ語における色彩語の意味とグリムメルヒエン（第2報）

満足 忍

Bedeutungen der deutschen Farbenwörter und Grimms Märchen (2)

Shinobu Manzoku

4. 灰色 (Grau, grau)

灰色は黒色と白色と同様に色味を持たない色調で、黒色と白色の混合色である。日本語には grau に相当する訳語はないため、灰や鼠の名詞を例えとして付加してこの色を表している。ドイツ語でも grau wie Asche, grau wie eine Maus といった陰影をつけた語が豊富に見受けられる。最も一般的な用法としては、老人のひげや髪の形容 (Graubart; grauhaarig; Graukopf) である。どんよりした海や雲で覆われた空の表現として (die graue See; der Himmel ist ganz grau), 褪せた色として用いられ (grau werden; graue Haare = 年を取る, er war ganz grau im Gesicht = 青ざめた顔), 物がかびる場合に動詞形 (im Keller graut alles) で用いられている。また、退屈で味気ない意味として (der graue Alltag = 単調な毎日; die Zukunft sieht grau aus = 期待のない未来), 時間的空間的に不分明なこと (in grauer Ferne = 遠い昔; in grauer Vorzeit = はるか大昔) の表現もある。一方、白とも黒とも判断がつかない状況、いわゆる半ば闇の状態 (grauer Markt = 闇市) にも好まれて使われている。

民俗的には、灰色は徘徊する死者、白色と黒色の中間色として靈の色である。それゆえに花嫁は黒色と同様に灰色の服を着てはならないと

伝えられている。謝肉祭の夕べの愛の神託の際に、恋人の代わりに姿を見せる灰色の鳥や灰色の小人は死を告げるものである。特に民間伝説では、灰色の小人や小人に似た小妖魔 (Graumännchen) は、宝の番人、家の精、森や山の精として頻繁に登場している。また、灰色の小鳥は死を告げる鳥であり、ペストは灰色の小さな小人として現れる。grau は graublau, graubraun, graugelb, graugrün, grauschwarz, grauweiß などと他の色彩との合成語も豊富である。

KHM における表現の特徴として、上述したことおり、黒色と白色の中間色として、はっきりしない、得体の知れない事象を表している。老人や年を取った小人として 4 例、顔の様 2 例、ひげ 3 例に用いられている。KHM の日本語訳では、これらのほとんどが「白いひげの」「白髪混じりの」「白いひげをはやした」と訳されている。しかし、例えば原文で記されている「灰色の小人」とはやはりニュアンスが異なっており、「白いひげ」にはそれほどネガティブな印象はなく、清潔感さえも感じられる。灰色の事象の持つ不気味さ、何かが起こるであろう不安感は伝わってこない。また、髪が灰色だけではなく、顔や風体すべてが灰色であることは不気味な印象を一層強烈に印象付ける効果を持っているのである。KHM における灰色のもうひとつの特

徵としては、主人公の女性が着せられる「古い灰色の仕事着」が挙げられる（3例）。美に対する妬みからそれを覆い隠す、あるいは奪い取るためのKHMの手法のひとつであると思われる。灰色を形容する表現として、「氷のような灰色」3例、「灰のような灰色」2例、「霧のよう

[KHMにおける灰色]

身体=灰色の小人 KHM 62 : da sahen sie ein *graues Männchen*

身体=灰色の老いた小人 KHM 64 : begegnete ihm ein altes *graues Männlein*

身体=氷のような灰色の老いた小人 KHM 163 : sah er ein altes *eisgraues Männchen*

身体=氷のような灰色の老人、床まで達する老人の白いひげ KHM 169 : saß da ein alter *eisgrauer Mann an dem Tisch*

身体の一部（顔）=呪いで灰のように灰色の顔に赤い髪をした姫 KHM 197 : sie hatte ein *aschgraues Gesicht voll Runzeln*

身体の一部（顔）=怒りで灰のような灰色から朱色に変わる小人の顔 KHM 161 : sein *aschgraues Gesicht ward zinnoberrot vor Zorn*

身体の一部（ひげ）=胸まで届く氷のような長いひげの灰色の小人 KHM 182 : dem Rock ein *eisgrauer Bart über die Brust herabging*

身体の一部（ひげ）=黒い長い法衣、灰色の付けひげ KHM 192 : klebte sich einen *grauen Bart an das Kinn*

身体の一部（ひげ）=灰色の長いひげの老人 KHM 196 : mit dem langen *grauen Bart*

身体の一部（髪）=娘の灰色の弁髪、娘の金色の髪 KHM 179 : als der *graue Zopf abfiel*

服（仕事着）=灰色の古い仕事着 KHM 21 : zogen ihm einen *grauen alten Kittel an*

服（仕事着）=灰色の古い仕事着 KHM 135 : die gab ihr dafür einen schlechten *grauen Kittel*

服（仕事着）=灰色の古い仕事着 KHM 198 : zog ihren *grauen Kittel an*

服（鼠のマント）=濃い灰色のガウンを着た鼠 KHM 2 : in deinem *dunkelgrauen Flausrock*

服（マント）=霧のように灰色のマント KHM 22 : hatte einen *nebelgrauen Mantel umgetan*

海=紫と紺色と灰色の海 KHM 19 : war das Wasser violett und dunkelblau und *grau* und dick

海=黒ずんだ灰色の海 KHM 19 : da war die See ganz *schwarzgrau*

岩=灰色の岩 KHM 186 : rührte die Alte die *grauen Felsen an*

5. 緑色 (Grün, grün)

緑色は黄色と青色の中間色であり、視覚的には若い植物、若芽の成長を表す新鮮な植物の色である。例えば、*grüne Blätter*、大都市の緑地帯は *die grünen Lunge*、ホワイトクリスマス (*weiße Weihnachten*) に対して雪のないクリスマスは *grüne Weihnachten* と言われ、die

な灰色」1例がある。また、黒色との合成語の *schwarzgrau* が2例見られる。KHMにおいて灰色は黒色と白色の中間色というよりもむしろネガティブな意味の方が強い色彩語であると言える。

灰色の表現を項目別に分類して以下に示す。

灰色の表現を項目別に分類して以下に示す。

grüne Ampel(青信号), im Grünen wohnen(郊外に住む)などと使われる。これらの意味から転じて *grün*es Licht geben (許可を与える), *grün*e Minna (犯人護送車) のような使い方がある。一方、緑の草木の色から新鮮・若い・未熟・未経験の意味が生じている (生乾きの薪 = *grün*es Holz; 青二才 = *ein grüner Junge*)。抽象的な意味として, er ist mir nicht *grün* (私

は彼に好意を抱いていない), grüne Hochzeit (結婚日), sich vor Ärger grün und gelb werden (かんかんに怒る), grün und gelb または grün und blau schlagen (激しく殴る), bei Mutter grün schlafen (自然に囲まれて、青空の下で) などの表現が見られる。他の色彩との合成語には grünblau がある。

民俗的には、緑色は森や水の精、いわゆる自然と草木の精靈の色である。その精靈の装いと実りへの魔力は希望の色として、春の祭や聖靈降臨祭での行列でつける緑色の草や葉飾りの仮面で表される。様々な祭、クリスマスツリー、五月柱、結婚式、収穫祭では緑色の枝や木は、成長の証、シンボルとされている。一方、緑色は毒の色（今日でも薬局の瓶でも）ともされ、同時に解毒剤の色でもある。人を睨み殺すという伝説上の怪物のバジリスクも緑の目をしていくと伝えられている。緑色はイスラム教では預言者の色であり、キリスト教では希望の色である。司祭はミサの一定期間に緑の祭服をまとつ

[KHMにおける緑色]

身体=黒い男、緑の男、血のように赤い男 KHM 43 : dann sah ich einen grünen Mann

身体=ストーブの傍で乾かした緑の木のように体の曲がった男 KHM 52 : grünes Holz, hinterem Ofen getrocknet !

身体の一部（顔）=驚きと怒りで黄色く緑になる後の顔 KHM 53 : gelb und grün werden

身体の一部（顔）=嫉妬に怒り黄色と緑になる2人の兄の顔 KHM 91 : ward gelb und grün vor Neid

動物（蛙）=緑の娘（ヒキ蛙の娘） KHM 63 : Jungfer grün und klein

動物（蛙）=緑のヒキ蛙 KHM 127 : Jungfer grün und klein

鳥（オウム）=金の籠の中の緑のオウム KHM 186 : grüne Papageien saßen in goldenen Käfigen

羽=赤と緑の羽に金色の首をした小鳥 KHM 47 : hatte recht rote und grüne Federn

木=瑞々しい緑の木 KHM 3 : als die Bäume wieder in frischem Grün standen

木=春の緑の木々 KHM 47 : da war es grün

木（生垣）=緑の生垣 KHM 36 : brachte sie zu grünen Hecken

木（菩提樹）=城の中の緑の菩提樹 KHM 186 : stand eine grüne Linde

木（森）=森の深い緑 KHM 69 : die Sonne schien hell ins dunkle Grün

木（森）=緑の森 KHM 166 : erblickte den grünen Wald

木の枝=木々の緑の枝 KHM 99 : sah in die grünen Zweige hinein

ている（しかし、特例の祝祭の時は白色、喪のミサの際は黒色が求められている）。

緑色は、季節や自然界の色と関連が深い色であることから、KHMの中にも好んで多く用いられている。「緑の木々」「緑の菩提樹」など息吹く若い草木や森や草原の形容として、あるいは例えば「木々がまた緑になると (als die Bäume wieder in frischem Grün standen)」という表現のように春の訪れを告げる視覚的な意味で使われているのが18例ある。「歓喜で緑の枝を振る」慣わしによる表現1例、生命力を意味する「命の緑の葉」が1例、動物では若い「緑の蛙」2例、オウム1例ある。勇ましい獵師の男が青い服で登場するのが2例、青い服の悪魔が1例ある。一方、抽象的な意味合いで使われているのは、若い男の「緑の男」が1例、「かんかんに怒る」意味で緑の色を含んだ慣用句(gelb und grün werden)が2例ある。

緑色の表現を項目別に分類して以下に示す。

木の枝=歓喜に緑の枝を頭上で振る人々 KHM 199 : *grüne Zweige in der Luft schwangen*

木の葉=生き返らせる緑の葉を咥えた蛇 KHM 16 : hatte drei *grüne Blätter im Mund*

木の葉(液)=緑のハシバミの液 KHM 81 : euch mit *grünem Haselsaft waschen*

木の葉=桜の木々に茂る緑の葉 KHM 148 : waren wieder alle andere Eichen voll *grüner Blätter*

木の葉=緑の小さな葉 KHM 157 : ein *grün Blättlein aufs Löchlein geklebt wäre*

木の棒=長い緑の棒 KHM 157 : lange *grüne Stange tragen*

木・草(春)=春の緑 KHM 161 : draußen alles *grün war*

草=緑の草 KHM 13 : war kein *grünes Hälmlchen zu merken*

草=ねずの木の下の緑の草 KHM 47 : lag sie sie in das *grüne Gras*

草(クローバ)=緑のクローバ KHM 129 : euch über den *grünen Klee loben* 〈褒めちぎる〉

茂み=緑の茂み KHM 21 : als er durch einen *grünen Busch ritt*

草原=緑の草原 KHM 5 : legte sich draußen auf der *grünen Wiese*

草原=肥沃な緑の草原 KHM 173 : hütete seine Herde auf fetten *grünen Wiesen*

草原=緑の草原 KHM 179 : breitete sich eine *grüne Wiese aus*

草原=緑の草原 KHM 181 : auf einer *grünen Wiese stand eine reinliche Hütte*

海=緑色と黄色の海 〈緑と黄色は気分が悪いの意〉 KHM 19 : war die See ganz *grün und gelb*

布=緑の絹地に金の花、赤いビロードの布団 KHM 169 : wuchsen auf *grünseidenem Grund gol-dene Blumen*

布=机とベンチを覆う緑の布 KHM 188 : überzogen sich Tisch und Bänke mit *grünem Tuch*

布(敷物)=金の地に緑の葛の刺繡の敷物 KHM 188 : stiegen *grüne Ranken herauf*

服=お金の出る悪魔の緑の上着 KHM 101 : zog den *grünen Rock aus*

服=緑の服を着た猟師 KHM 111 : ein Jäger in *grünem Kleid*

服=緑の猟師服 KHM 199 : der einen *grünen Jägerrock trug*

6. 青色 (Blau, blau)・紫色 (violett)

青色は、わが国でも空色とか紺色などと俗称されているように、薄い青色は空の色 (der blaue Himmel) であり、濃い青色は海の色 (das blaue Meer; Blaujacke=水夫) である。地平線の色、限りのない遠方を象徴する語でもあり、詩文学では die blaue Blume はノバーリスのモティーフに見られるごとくロマン的な憧れとして文学上の象徴とされている。悪い意味としては、制限のない意から転じて仕事をさばる表現 (blaumachen) にも使われる。blaue Bohnen は鉄砲玉を表す。教師が親に送付する子供への注意書は ein blauer Brief といわれる。また、煙

草などの煙の色 (blauer Dunst) としても用いられている。煙の意味から転じて、人を煙に巻く・偽る・騙す際にも用いられ (einen blauen Dunst machen), 不快な体験をした際には, sein blaues Wunder erleben と表現される。静脈の色であることから、血の気を失った皮膚の色 (blaue Lippen haben; blau vor Kälte sein) でもある。酒に酔った状態でも使われる (völlig blau sein; Blaufahrer=飲酒運転者; Blaukreuzungverrein=アルコール依存の治療機関)。他の色との合成語としても多く用いられている (bläulichgrün; bläulichrot; blaurot; bläulichweiß; blauschwarz)。bläulichrot, blauschwarz は violett とほぼ同義である。

今日なお青色は稀に喪の服の色でもある。夢占いや神託の慣わしでは一般に不吉な色であり、ペスト、死神、人魂、鬼火は青色の炎あるいは煙の姿で現れる。魔女や魔法使いは青い火を持って、あるいは青い服で登場して産婦に近づき乳児に魔法をかけると伝えられている。一方、空の明るい色のイメージから青色は、キリストやマリアの服に見られるように神性の色でもあり、そのため処女の色でもある。

KHMにおける青色の最も多いのは「青い空」の7例であり、「青い限りのない遠方 (in der blauen Ferne)」の意味でも2例使われている。死人や病人、怯えた人の顔色を表す表現として
〔KHMにおける青色〕

身体の一部 (あざ)=杖でつける青いあざ KHM 104 : so streiche ich dir den Rücken *blau* an
花=青い花の咲く麻の畑 KHM 149 : mitten in einem *blaublühenden* Flachsfeld stand
布(ネッカチーフ)=蛇の好きな青い絹のネッカチーフ KHM 105 : breitete es sein *blauseidenes*

Halstuch neben sich aus

空=青い空 KHM 9 : ich will gehen, so weit der Himmel *blau* ist

空=中央は青いが両端がひどい雷雨のように赤い空 KHM 19 : war der Himmel *blau* in der Mitte

空=青い空 KHM 31 : ich will gehen, so weit der Himmel *blau* ist

空=青い空に浮かぶ綿雲 KHM 61 : standen am *blauen* Himmel kleine Flockenwolken

空=青い空に吹き飛ばされる騎兵隊 KHM 71 : in die *blaue* Luft über alle Berge weg

空=青い空、緑の草原 KHM 181 : der Himmel war *blau*

空=青い空 KHM 198 : der Himmel war *blau*

遠方=青い遠方 KHM 183 : erblickte er in der *blauen* Ferne einen steilen Berg

遠方=青い遠方 KHM 193 : als er in *blauer* Ferne einen Berg erblickte

海=紫と紺色と灰色の海 KHM 19 : war das Wasser ganz violett und *dunkelblau* und grau

煙=青い（城に使える人々）煙の入ったガラス瓶 KHM 163 : mit einem *bläulichen* Rauch angefüllt waren ; so drang der *blaue* Rauch heraus

ランプ=青く燃え続ける魔法のランプ KHM 116 : das Licht brennt *blau* ; zündete sie an dem *blauen* Licht an

〔KHMにおける紫色〕

海=紫と紺色と灰色の海 KHM 19 : war das Wasser ganz violett und dunkelblau und grau

の色であり、熟したレモンの色とされている。

その他、注意を促す色(die gelbe Karte ; gelbes Licht)でもあり、中国人や日本人やモンゴル人

7. 黄色 (Gelb, gelb)

ヨーロッパでは黄色は金の色であり、向日葵

のいわゆる黄色人種を指している。また、蒼白な顔色の表現 (du bist heute ja richtig gelb)にも用いられる。一方、伝説やメルヒエンでは、しばしば妬みや嫉妬の顔色 (er war gelb vor Neid; ihm stand der gelbe Neid im Gesicht), 怒りの顔色の特色とされている。他の色彩との合成語として gelbgrün, gelbrot としても使用される。

隠された宝の上には黄色い花が咲くという伝説があるが、信仰や慣習では黄色はネガティブな意味合いを持つことが多い。「それゆえに破産者の黄色い帽子やユダヤ人のマントに付けられた黄色いリングが生じたのであろう」とゲーテは彼の『色彩論』の中でも認めている。愛する人に黄色の物を贈ってはならないとされ、結婚式の黄色い花は不吉とされている。黄色は娼〔KHMにおける黄色〕

身体の一部（顔）=嫉妬のあまり黄色く緑になる後の顔 KHM 53 : ward gelb und grün vor Neid
身体の一部（顔）=怒りで黄色と緑になる2人の兄の顔 KHM 91 : ärgerten sich die beiden so viel, daß sie gelb und grün waren

身体の一部（顔）=黄色い顔に大きな赤い目をした魔女 KHM 69 : kam eine alte krumme Frau hervor, gelb und mager

身体の一部（髪）=黄色い髪をした夫 KHM 139 : er hat gelbe Haare

葉=黄色いしなびた葉 KHM 189 : die gelben welken Blätter

数取り=黄色い数取り（金貨） KHM 59 : das sind gelbe Gickelinge

海=緑色と黄色の海<緑と黄色は気分が悪いの意> KHM 19 : war die See ganz grün und gelb

ワイン=白と赤と黄色のワイン KHM 40 : ein Glas gelben Wein

馬車=かぶらをくり抜いた黄色い馬車 KHM 63 : gab ihm eine ausgehöhlte gelbe Rübe

8. 茶色 (Braun, braun)

茶色や褐色は、黄色と赤色と黒色の混合色である。rotbraun (赤褐色、狐色の), rostbraun (錆色の), kastanienbraun (栗毛色の) としても使われている。日焼けした肌の色 (von der Sonne braun gebrannt sein), 鷺色の髪色 (braunköpfig) や秋の情景は im Herbst bräunen sich die Wälder と描写される。また、ナチ党员の制服のシャツを軽蔑して das blaue

婦や流浪人や聖祭の冒瀆者の標識でもあった。類似魔法では、黄緑色 (gelbgrün) はときとして緑色の持つ祝福の力とも関連しており、赤色の隣色としてアルニカ、オトギソウなどの花の場合、稻妻や嵐からの防衛に作用する。また、黄色は類推による魔術の使用や精神感応力治療（黄色いセイヨウアブラナ、尿、結婚指輪、真鍛の皿は黄疸や胆囊病に効くという）の際に重要でもあるとされている。黄色や赤い髪の人は黒髪の人よりも才能に長けていると一部地域で伝えられているほど高く評価されている。

黄色は中間色のため、極性を好む KHM ではその使用は極めて少ない。特色的なものとして挙げられるのは、驚き、嫉妬や怒りによる顔色の変化としての3例ぐらいである。

黄色の表現を項目別に分類して以下に示す。

Hemd と言われ、慣用句には braun und blau schlagen (あざができるほどさんざん殴る) の表現がある。他の色彩との合成語として braun-gelb, braunrot, braunschwarz がある。

語源的には茶色は、茶の毛皮をした動物の表すことに由来する。雅語や動物童話では Braun は熊 (Braunbär; Meisterbär) の名前と同意に使われている。民謡の言語では性的な意味を持つており、Braune (褐色) は女性の陰部を示す。後の時代の抒情詩の中に使われている茶色

い下女 (das blaue Mägdelein) は名誉に縁のない社会的に身分の低い少女を表している。古くは茶色は紫色とも同意であり、また、濃い黄色・赤色・黒色 (Braunbier) とも厳密に区別されていない。ごく稀に茶色は喪の際の色である一方、しばしば未婚の故人の棺の色もある。茶色の目は死ぬときに澄み、青い目は濁るという言い伝えもある。

黄色と同様に茶色も中間色のため、やはり

[KHMにおける茶色]

身体=鉄錆のように茶の身体の山男 KHM 136 : der *braun* am Leib war wie rostiges Eisen

身体の一部(顔)=変装のため茶に染めた顔 KHM 122 : *bräunte* er sich schnell das Gesicht

身体の一部(顔)=変装のため茶に染めた泥棒の名人の顔 KHM 192 : dann färbte er sich das Gesicht *braun*

身体の一部(顔・老婆)=茶色い顔に赤い目をした老婆 KHM 193 : eine Alte mit *braunem* Gesicht und roten Augen

身体の一部(髪)=男性用礼服の茶と赤のような髪色 KHM 114 : *braun* und rot, wie meines Herrn Vaters Bratenrock

動物(猫・斑点)=白に茶色の斑点のある猫の子 KHM 2 : weiß mit *braunen* Flecken

動物(牛・木製)=茶に塗られた木製の子牛 KHM 61 : ein Kalb aus Holz machen und *braun* anstreichen

9. 金・金色 (Gold, golden)

金色は、まばゆい輝き、豪華さ、安定で頑丈、鑄びない、純正を表す。goldgelber Honig (黄金色の蜂蜜), rotes Gold (まばゆい黄金), schwarzes Gold (黒い黄金〈石炭や石油〉), weißes Gold (雪) のように他の色彩語と共に使われることが多い。また、金貨や金製品から転じて富や財力、金のような貴重な物 (Gold in der Kehle haben=素敵な声の持ち主, 歌手が喉で稼ぐ; im Gold schwimmen=大金持ちである; nicht mit Gold zu bezahlen sein=かけがえのない) を指す。金は太陽の光と密接な関係があるとされるため, das Gold der Sonne または goldener Sonnenschein (黄金に輝く太陽) と表現される。また、黄金の輝きの表現として goldblondes Haar (金髪; Goldstoff=金襴),

KHMにおいての使用は極めて少ない。その中で注目すべき点を以下に挙げる。変装のために「顔を茶色」に染めるのが2例見られ、煤で顔を黒く染める (KHM 65) と共にこれは古い慣習によるものである。また、日本語の「錆色」と同様の「鉄錆のように茶色の身体」が1例、魔女の「茶色い顔」が1例ある。

茶色の表現を項目別に分類して以下に示す。

Goldbuchstabe (金文字) と使われる。また, Goldfuchs や goldbraunes Pferd と動物の毛皮の色にも使われている。さらに金は優れたもの、希少価値のあるもの、隠されていて見つけることが困難な宝物、この上なく貴重で素晴らしいものと位置づけられている (die goldene Mitte=中庸; goldene Worte=金言; das goldene Zeitalter=黄金時代)。さらに発展して極性を表す (Goldchen=恋人; Goldjunge=可愛い男の子; Goldmädchen=可愛い女の子; ein goldiges Kind=愛くるしく可愛い子; treu wie Gold sein=極めて誠実な; ein goldenes Herz=誠実そのものの心; goldrichtig=全く正しい)。

民俗的には、金の持つその色彩・光沢により、教会や世界に広まっている宗教儀式、また、装飾品や工芸品に多く利用され、金色は護符や薬

にも好まれて使われる色である。日本でも、仏像の金色は拝む色であり、その輝きが仏の尊さや浄土の喜びを表している。花嫁の金の飾りや金の婚約指輪は、邪視を防ぎ、金の耳飾りは眼病に効くと伝えられている。金は鋳びないために不滅を表し、古代では仮面を純金で作り、死後の永遠の存在や現世から離れた存在を表した。また、金色は、民間療法や類似魔法では、黄疸や丹毒を払うとされている。指に金の指輪をして種を蒔くと黄金の稲を得るといわれている。薬草の収穫時には金や銀の鎌で刈り取らねばならないと伝えられている。金は、九柱戲や揺り籠や棺などの隠れた宝としても用いられ、森の中のアヒルや鶯鳥も金の姿で登場する。また、精靈からもらう炭のような取るに足りない贈り物は金に変わることも多い。黄金の日曜日や黄金の年齢などと金に対比させて稀で貴重な物としても用いられる。地域的には、金の机、金の馬、金の車などが収穫時や新年の歌にも登場する。神々の住居は金がはめ込まれている。

KHMにおける金色は、金属を表しているのか否か明確でない場合も多いため、本分類では明らかに金属を指しているものは除外した。それでも、金色はKHMでは55例に使用されており、白色、赤色に次いで多い色彩語である。そのほとんどの場合、神や王族などの高貴な身分に属していることを表していると共に、裕福・豪華であることを象徴する色彩語でもある。銀色と共に使われているのが7例ある。また、金色は「金のリンゴ」「金の鳥」のようにこの世において極めて稀にしか存在し得ない貴重な物を表しており、それを手に入れるためにはよほどの冒険や困難を乗り越えることが求められ、主人公の行動ならびに課題の解決へのきっかけの大きな要因となっている場合が多い。

[KHMにおける金色]

身体=金の魚、金の百合、金の子馬、金の子供 KHM 85 : die Kinder waren ganz golgen

身体の一部（足）=金に塗った老人の足 KHM 196 : auf meinem vergoldenen Fuß

金色の主な分類とその概要を以下に紹介する。「金の服」には11例あるが、内1例のみが王子の服で、10例は、王族の女性や救済者から王宮で開催される舞踏会に出る主人公の貧しい女性に贈られる服である。「金の城」は3例、豪華な金の調度品や寝具が4例、王子や姫の玩具の「金のまり」が2例ある。また、高貴な身分の証として「金文字」で名前が記されるのが2例ある。

金の動植物としては「金のリンゴ・金のリンドウの木」6例であり、「金の馬」2例、「金の鳥・金の羽」5例、「金の魚」2例、「金の蛇」「金の花」各1例ある。課せられた問題を解決することにより、あるいは彼岸者からの贈り物として主人公が手にすることが多い。人間の身体の部位で特徴的なのは、「金色の髪」6例と「金色の指」2例である。神から禁じられた部屋に入ったことで金色に染まる髪（1例）や指（2例）は、虚偽に対する戒めを主人公に与えることとなる。なお、「金色の髪」の内4例が女性で、后や姫、マリアの子であり、高貴で恵まれた境遇を表している。太陽は日本語のように赤色ではなく、golden wie die Sonneのように金色で表されている（4例）。

総合的に解釈すると、金色は他の色彩語に見られるような明確なポジティブとネガティブの面は見受けられず、主として人間が持つ富・幸福への憧れの目標物として存在することが多いと言える。黄色との合成語としてgoldgelbの表現が1例、輝きを強調したgoldglänzendの表現が1例、名詞との合成でGoldkleider, Goldbrunnenの2例で、ほとんどの場合、他の形容を伴わないで単独に用いられている。

金色の表現を項目別に分類して以下に示す。

身体の一部（髪）＝足の先まで伸びたマリアの子の金の髪 KHM 3 : war von seinem *goldenem Haar* bis zu den Fußzehen bedeckt

身体の一部（髪）＝悪魔の3本の金の髪の毛 KHM 29 : aus der Hölle drei *goldene Haare* von dem Haupte des Teufels holen

身体の一部（髪）＝金の髪をした后 KHM 65 : der hatte eine Frau mit *goldenem Haaren*

身体の一部（髪）＝銀と金の髪色 KHM 114 : die Prinzessin hat silbernes und *goldenes Haar*

身体の一部（髪）＝金に染まる少年の髪 KHM 136 : es war schon ganz *vergoldet*

身体の一部（髪）＝娘の灰色の弁髪、娘の金色の髪 KHM 179 : da quollen die *goldenen Haare* wie Sonnenstrahlen hervor

身体の一部（指）＝金に染まったマリアの子の指 KHM 3 : da ward der Finger ganz *golden* ; das *Gold* blieb an dem Finger

身体の一部（指）＝金に染まる少年の指 KHM 136 : es war schon ganz *vergoldet*

動物（馬）＝風より速く走る金の馬 KHM 57 : wenn er ihm nämlich das *goldene Pferd* brächte

動物（馬）＝金の魚、金の百合、金の子馬、金の子供 KHM 85 : daß das Pferd zwei *goldene Füllen* bekam

動物（魚）＝金の魚、金の百合、金の子馬、金の子供 KHM 85 : der Fisch war ganz *golden*

動物（魚）＝金の泉、金の魚、金の蛇 KHM 136 : wie ein *goldner Fisch* sich darin zeigte

動物（蛇）＝金の泉、金の魚、金の蛇 KHM 136 : wie eine *goldne Schlange* sich darin zeigte

鳥（首）＝赤と緑の羽に金色の首をした小鳥 KHM 47 : um den Hals war das lauter *Gold*

鳥（雛）＝12羽の金の雛 KHM 88 : mit zwölf Küchlein ganz von *Gold*

鳥・羽＝金の羽、金の鳥 KHM 57 : eine seiner *goldenen Federn* fiel herb ; er meinte den *golden* Vogel schon zu finden

鳥・羽＝金の鳥、金の羽 KHM 60 : der ganz *golden* war ; es fiel aber nur eine *goldene Feder* herab

鳥・羽（鶯鳥）＝金の羽の鶯鳥 KHM 64 : eine Gans, die hatte Federn von reinem *Gold*

花（百合）＝金の魚、金の百合、金の子馬、金の子供 KHM 85 : zwei *goldene Lilien* aufwuchsen

リンゴ＝命の木の金のリンゴ KHM 17 : ein *goldener Apfel* fiel in seine Hand ; den *golden* Apfel

リンゴ＝葉もつかない金のリンゴの木 KHM 29 : der sonst *goldene Äpfel* trug

リンゴ＝金のリンゴの木 KHM 57 : ein Baum, der *goldene Äpfel* trug

リンゴ＝銀の葉に金の果実（リンゴ） KHM 130 : Früchte von *Gold* hingen dazwischen

リンゴ＝宴で姫が投げる金のリンゴ KHM 136 : du sollst einen *goldenen Apfel* werfen

リンゴ＝黄金色のリンゴ KHM 165 : so sind *goldgelbe Äpfel*

布（敷物）＝金の地に緑の薦の刺繡の敷物 KHM 188 : auf *goldenem Grund* stiegen grüne Ranken herauf

布（ネッカチーフ）＝金で刺繡した大きな絹のネッカチーフ KHM 111 : ein großes Halstuch, von Seide, mit *Gold*

服＝金の服を着たマリアの子 KHM 3 : seine Kleider waren von *Gold*

- 服=金と銀で織ってある服 KHM 6 : als wärs von *Gold* und Silber gewebt
服=金尽くめの服の女性 KHM 19 : seine Frau war in lauter *Gold* gekleidet
服=金と銀の服 KHM 21 : warf ihm der Vogel ein *golden* und silbern Kleid herunter
服=太陽のような金の服, 月のような銀の服 KHM 65 : drei Kleider haben, eins so *golden* wie die Sonne
服=金の服 KHM 88 : mußte das *goldene* Kleid hingeben
服=金の服 KHM 135 : gab ihm prächtige *Goldkleider*
服=金の服の王子 KHM 161 : war ganz in *Gold* gekleidet
服=金に輝く絹の服を着た姫 KHM 193 : an den seidenen *goldglänzenden* Kleidern, merkte er
服(太陽)=銀の月の刺繡の服, 金の太陽の刺繡の服 KHM 186 : mit *golden*en Sonnen gestickt
服(マント)=金と銀で織られた婚礼のマント KHM 22 : läßt den Mantel sticken mit *Gold* und Silber
ふさ=金のふさ KHM 19 : große *goldene* Quasten
布団=黒檀の寝台に金の刺繡入りの掛け布団 KHM 39 : die Decken waren mit *Gold* gestickt
布団(花)=緑の絹地に金の花, 赤いビロードの布団 KHM 169 : auf grünseidenem Grund *goldene* Blumen
靴=金色の上靴 KHM 21 : der Pantoffel war klein und zierlich und ganz *golden*
靴下止め=妹の金色の靴下止め KHM 11 : sein *goldenes* Strumpfband
糸=つむが織った金の糸 KHM 188 : ritt an dem *golden*en Faden zurück
首輪=妹の金色の首輪 KHM 11 : das Rehlein mit dem *golden*en Halsband
まり=姫の金のまり KHM 1 : ich weine über meine *goldene* Kugel
まり=王子の金のまり KHM 136 : fiel ihm sein *goldener* Ball in den Käfig ; gab ihm den *golden*en Ball
文字=棺の金文字 KHM 53 : schrieben darauf seinen Namen mit *golden*en Buchstaben
文=金文字の名前入りのネックチーフ KHM 111 : auf der linken ihr Name, alles mit *golden*en Buchstaben
泉=金の泉, 金の魚, 金の蛇 KHM 136 : der *Goldbrunnen* ist hell und klar wie Kristall
城=姫の隔離されている金の城 KHM 57 : wenn er die schöne Königstochter vom *golden*en Schlosse herbeischaffen könnte
城=シュトロームの金の城 KHM 93 : das *goldene* Schloß von Stromberg
城=金の太陽の城 KHM 197 : auf dem Schloß der *golden*en Sonne
太陽=金色に沈む太陽 KHM 165 : wo die Sonne aber zu *Gold* gegangen ist
10. 銀・銀色 (Silber, silbern)
- 金色が黄色と同義であるのと同様に、銀色は「白く・明るく輝く」と同義であり、金に次ぐ豪華さを持つ (Silberfaden=銀の刺繡入りの布; das silberne Zeitalter=白銀時代)。クリスマス 前の日曜日が der Goldene Sonntag と言われるのに対して 2 週間前のこととは der Silberne Sonntag と言われる。文学では特に月の表現 (das Silber des Mondlichts=月光の銀色の優しい輝き; Silberglanz des Mondes; Silberlicht des Mondes; Silberschimmer des

Mondes) として、白く輝く髪や髭の色として (Silberbart; der Greis im Silberhaar) 好まれて使われる。また、金属としての銀の光沢から転用されて、鮮明な・澄んだ高い響きの・透明な意味 (silberhelles Wasser; silberhelles Lachen; silberhelle Stimme; Silberklang; der silbrige Klang des Cembalos=銀鈴を振るような音) として使われている。他の色彩との合成語としては、silberblond, silbergrau(銀灰色), silberweiß (銀白色) などがある。

民芸では銀はあまり大きな役割をしていないものの、単に鋳造された銀貨として農民の好む金属である。先祖伝来受け継がれた銀製品は魔力を寄せ付けない力を持ち、銀の指輪はお守りになり、銀の耳飾は歯痛を鎮めると伝えられている。魔弾の材質にも用いられ、薬草の根は銀製の道具で掘ると魔力を増すと言われている。

[KHMにおける銀色]

身体の一部 (髪)=銀と金の髪色 KHM 114: ein silbernes und goldenes Haar

動物 (ロバの鼻)=銀の鼻をしたロバの子 KHM 158: einen jungen Esel mit einer silbernen Nase

木 (葉)=銀の葉に金の果実 (リンゴ) KHM 130: Baum, der hatte Blätter von Silber

服=金と銀で織ってある服 KHM 6: als wärs von Gold und Silber gewebt

服=金と銀の服 KHM 21: ein golden und silbern Kleid

服=太陽のような金の服、月のような銀の服 KHM 65: drei Kleider haben, eins so silbern wie der Mond

服=銀の月の刺繡の服、金の太陽の刺繡の服 KHM 186: das zweite mit silbernen Monden gestickt

服=月のような銀の服 KHM 193: ein Kleid so silbern als der Mond

服 (マント)=金と銀で織られた婚礼のマント KHM 22: läßt den Mantel sticken mit Gold und Silber

靴=絹と銀で編んだ上靴 KHM 21: mit Seide und Silber ausgestickte Pantoffeln

おわりに

日本語は、草木や動物といった自然を表す語を用いた古来からの風情ある色彩語が非常に豊富な言語であり、実際に様々な形で表現されている。同じ色に対しても異なった呼称を有しており、微妙な違いを表現することが可能であり、

KHMにおける銀色は金色と同様に金属を表しているのか否か明確でないため、本分類でも、明らかに金属を指しているものは分類から除外した。金色がKHMの中で重要な色彩語として多用されている一方で、銀色の使用は10例と極めて少ない。銀色が単独で使われているのは「ロバの鼻」「上靴」の2例のみで、残りの8例では、「金と銀の服」「金と銀の刺繡入り」「銀の葉に金のリンゴ」のように、金色と一緒に使われて、高価なもの、豪華なもの、貴重なもの来形容している。この場合銀色は金色を補足する形、つまり、金色に対する二次的、あるいは副次的な色と考えられる。「銀の服」「銀の刺繡」「銀の布」などの7例の内、3例は太陽を金としている一方で月を銀で表している。

銀色の表現を項目別に分類して以下に示す。

いろいろな色合いを思い描くことができる。例えば、赤紅、赤銅色、鶯茶、琥珀色、山吹色、芥子色、萌葱、若竹色、浅葱、瑠璃色、茄子紺、京紫、紫黒色、鈍色…等々、『色の手帳』(1986年、小学館)では、赤系の色74、茶系の色75、黄系の色38、緑系の色46、青系の色35、紫系の色34、灰・白・黒系の色46の計358の色見本と

色名が紹介・解説されている。しかし、時代の趨勢と共にこれらの内、多くの色名が埋もれたままで使用されることなく、死語となりつつあり、現代社会ではますます理解されなくなってきたことは止む得ないこととは言え至極残念な思いがする。

一方、ドイツ語を含む欧米語では、例えば日本語の「きみどり」のような語法で基本色名に grauschwarz のように別な色名をつけたり、 dunkelblau のように「明るい」「暗い」などの修飾語をつけて用いたり、または weiß wie Schnee のように名詞を例に伴って形容している場合がほとんどであり、日本語に比べると色彩語の表現法は極めて乏しいと言える。しかし、色彩語を使った表現は誰もが直感的に受け入れることができる、いわゆる絵画的な効果を有しております、特に民間メルヒエンや伝説にとっては重要なモティーフのひとつであると言える。

KHM の初版と決定版を比較してみると、色彩語の使用にあたってもウィルヘルム・グリムの細やかな気遣いが伺える。そこで最後に、初版と決定版における色彩語の使用の主な違いを KHM 21『灰かぶり (Achenputtel)』を例として紹介する。

初版で zwei Töchter, die waren von Angesicht schön, von Herzen aber stolz und hoffärtig und böse (二人の娘は顔は美しかったが、心は高慢で思い上がりが強く意地悪であった) の表現は決定版では、die schön und weiß von Angesicht waren, aber garstig und schwarz von Herzen として、容貌と心の対比を一層分かり易く明確な白色と黒色の対比を用いて表現している。da lag ein prächtig silbern Kleid vor ihm (立派な銀色の服が彼女の前に置かれていた) の表現は warf ihm der Vogel ein golden und silbern Kleid herunter と金色が加えられて服の豪華さが一層強調された表現となっている。また、舞踏会に着ていく服をハシ

バミの木に願う wirf schöne Kleider herab für mich (素敵な服を私に与えてください) の表現は wirf Gold und Silber über mich と色彩語を用いて一層具体的に述べられている。一方、舞踏会に行くときには車が灰かぶりを迎える Bediente dabei in Blau und Silber, die hob es hinein (青と銀の服を着た召使が彼女を車に迎い入れた)、ein Wagen mit sechs Schimmeln, die hatten hohe weiße Ferderbüschle auf dem Kopf, und die Bedienten waren in Roth und Gold gekleidet (頭に高い白い羽飾りを付けた白馬に引かれた車で、召使たちは赤と金の服を着ていた) の初版の表現は決定版では全て削除されている。その他、初版で使われていた色彩語が省略されたのが 5 例、逆に決定版に加えられた色彩語が 7 例見られる。また、初版の einen alten grauen Rock (灰色の古い服) は決定版では einen grauen alten Kittel (古い灰色の服) と語順を入れ替えて服の意味合いを明確にすると共に微妙なニュアンスの違いを表現している。ウィルヘルムの行ったこれらの改訂は、KHM の特徴である筋の明確性と反復の効果を重視した結果であると考えられる。

参考文献

- Brüder Grimm (1983) Kinder- und Hausmärchen.
Winkler Verlag, München
- Peter Dettmering (1997) Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Urfassung 1812-1814. Verlag Dietmar Klotz, Frankfurt am Main
- グリム兄弟、高橋健二訳 (1976) グリム童話全集全 3 卷。小学館、東京
- 満足忍 (2009) グリムメルヒエンにおける色彩語の表現(1), (2). 日本大学歯学部紀要第 37, 81-100,
日本大学歯学部
- Gerhard Wahrig, Hildegard Krämer, Harald Zimmermann (1980) BROCKHAUS WAHRIG Deutsches Wörterbuch. Bd.1. Deutsche

ドイツ語における色彩語の意味とグリムメルヒェン（第2報）

- Verlags-Anstalt, Stuttgart
Gerhard Wahrig, Hildegard Krämer, Harald Zimmermann (1981) BROCKHAUS WAHRIG Deutsches Wörterbuch. Bd.3. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart
- Gerhard Wahrig, Hildegard Krämer, Harald Zimmermann (1983) BROCKHAUS WAHRIG Deutsches Wörterbuch. Bd.5. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart
- Gerhard Wahrig, Hildegard Krämer, Harald Zimmermann (1984) BROCKHAUS WAHRIG Deutsches Wörterbuch. Bd.6. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart
- Verlags-Anstalt, Stuttgart
Richard Beitl, Klaus Beitl (1974) Wörterbuch der deutschen Volkskunde. Alfred Kröner Verlag, Stuttgart
- Grosses Deutsch-Japanisches Wörterbuch (1985, 1998) 独和大辞典第2版. 小学館, 東京
- 谷口幸男, 福嶋正純, 福居和彦 (1985) 図説ドイツ民俗学小辞典. 同学社, 東京
- 宮田登, 深沢俊 (1989) 日欧対照イメージ事典, 北星堂書店, 東京
- 尚学図書・言語研究所 (1986) The color guide 色の手帖. 小学館, 東京